

じである、斯ういふ論法で、一時評判になつたものだ、イヤ楠君も其處に居たか、これは失敬々々、然し理窟は然うに違ひない、實際主人のために忠義を盡さうとするには、死ねばならぬところも死すに居て、他まで主人のためには働くが宜い、楠君なども湊川を切り抜ければ、早く死んで忠義の名を残したいところが生きて居て長く辛い思をするより、早く死んで忠義の名を残したいと云ふ一念で、主人を後に置き去りにする忠臣義士が多いので閉口する、これは名門ばかりの忠臣義士で、實は不親切な行方方としか申されんと、我を忘れて得意に辯ずるより、高山彦九郎は堪りかねて、福澤の首筋を右手に引握み、右の拳を固めて、此奴黙つて聞いて居れば、好い氣になつて、ペラペラと毛唐人の囁語、楠公と権助を同一にするとは、味噌も糞も見分けの付かぬ大痴漢だ、さアもう一言云つて見い、一拳の下に呼吸の根を止め、犬殺しに與れてやるワ、と怒鳴り付られて、福澤も大弱り、まア待ち給へ、高山君、君は然う短氣だから困る、勤王といふ事に就ては、僕も日本臣民として、一

日も忘れはせん、一通り僕の勤王論を味はつてから、活すとも殺すとも君の自由にし給へと云へば、彦九郎も合點して、ナニ勤王論だと、拜金宗の本尊とのみ心得て居た貴様が、勤王論の演説とは、酒頭童子が牡丹餅を喰はう、石地蔵が芳原通ひを始めやうといふやうなもので、少しは面白い、聞いて遣るから、早速始めると、突放されて、踏跟と尻餅一つ、痛さを堪へて顔を盛めつ、起ち上つて、エ、僕の勤王論といふは斯うだ、國民が一致協同して、金儲けに従事する、殖産興業を盛んにして、國家の富力を増進する、いくら強がつても金が無ければ、到底歐米列國と比肩することは出来ぬ、國體の尊嚴を維持するにも、國威の伸張を冀圖するにも、先づ財政の基礎を鞏固にせざれば、空理空論のみ世に行はれて、何の裨益する所もない、而して皇室は國家の根本なり、國家の富強は即ち皇室の尊榮なりと云ふ論法で、何でもドシ、働いて、金を儲けるのが、勤王の第一義、それを世人は此福澤を誤解して、拜金宗の我利々々主義を鼓吹するやうに云ひ傳へて居るが、實に迷惑

千萬の次第だと、一時遁れとは云へ、己れの本領を没却せず、巧みに云ひ廻したところは、流石福澤先生なりと、竊かに喝采する者あり、福澤は更に一轉語を下して、然し僕の勤王論は、門下の子弟に誤解せられて、金玉論となりしは返すくも遺憾の次第、これは僕も認めて、大に慙愧に堪えませんと、論結せり、

三四 頼山陽の放蕩

下婢上りの細君

福澤の勤王論即ち拜金宗の講釋終るや、群集の中より大聲にて、やア名論名論、何程勤王の大義を思ひ立つても、瘦腕ばかりで何事が出来るものか、高山君なども、勤王無二の偉丈夫でありながら、風餐露宿の漫遊生活で、生涯を終つたやうな始末、若し高山君にして、一國一城の富力を有せしめば、豈手を束ねて、おめく幕府の凌暴を傍觀せんやだ、必ず千百の健兒を指揮し

頼山陽の放蕩下婢上りの細君

て、天下の風雲を捲き起したに相違ない、僕なども夙に國史を讀んで、王霸の別を明かにし、皇室の式微と、幕府の擅制とを對照し、大に憤慨するところがあつて、外史の著述に従事したが、空しく一枝の筆を以て、天下を動かすと云ふことは到底思ひ寄らんことです、と絶叫せしは、眼窩陥りて、鼻梁のみ高く、澤畔に行吟する屈原とも見るべき憔悴枯槁の老書生、これぞ問はずと知れたる安藝の頼久太郎、三十六峰外史の山陽先生なり、徐々壇に登りて、ゴホンリと苦しきうな咳嗽を二つ三つ、諸君、僕は外史の著述に心血を瀝いで、遂に肺患に罹つたが、元を糺せば若い時の放蕩も、幾分か報つて来たと思ひます、今更昔の耻を晒すも面目ないですが、青年諸君のために、一つ懺悔を致さう、ナニ此處には青年は居ない、成程、さらば談話筆記を新聞へでも出して、娑婆の青年に讀ませては如何です、元來僕は多情多感の神經質で、御園氏の女を妻に貰ひ受けて、長男の承緒(聿庵)を擧げ、阿父さんと呼ばれても、品行が修まりませんで、随分親に苦勞を掛けました、父の

頼山陽の放蕩下婢上りの細君

春水は御存じの通り、始終閻魔に鹽辛を嘗めさせたやうな儼しい顔をして居る男で、非常に立腹しましてナ、僕を一室に閉ち籠め置き、大小便の外は、一切外へ出さぬ程で、大に閉口した事があります、加之に狂人だから坊主にして檻へ入れやうなぞ云ふ相談、今日なればどうしても巢鳴の瘋癲病院へ送られるところでした、尤も其筈です、今考へれば馬鹿らしい、或る寡婦さんとラブを交換しましてナ、僕は其の寡婦さんの容貌を寫生して、得意の七言絶句で贊をしました、それを書齋に掛けて朝夕涎を流して見惚れて居たのですから、父の立腹るも無理のないところですが、それから菅茶山の塾へ預けられ、茶山の命で諸生を監督して居ましたが、又此處でも下婢と妙な關係を付けた事が、茶山の耳へ入つたので、老爺さん立腹りましたよ、大藥籠から蒸し立ての薩摩芋のやうに、ポツ／＼と湯氣を立てましてナ、僕を逐ひ出しました、僕も往きところに困つて、どうして宜いかと、門前に立つて居ると、恰度梅の花の眞盛り、日は暮れ掛つて、玻璃球のやうな月が、東の空へ上つ

て、梅花を照らし、疎影横斜、暗香浮動、イヤどうも面白い景色で堪へられませんが、絶句を一つ作りました、まだそれでも詩興が湧いて、二つ作り三つ作り、遂に梅花三十首を、半時間ばかりで作り上げました、早速それを茶山に見せたところが、老爺さんも驚いて、放逐だけは、勘辨して遣ると云はれました、何れにしても其頃の僕は、一個の放蕩兒、瘋癲漢として、親戚郷黨に取扱はれたものです、爲めに妻(御園氏)は離縁となつて、ますく無責任の行動を取りました、果は毒を喰は、皿までと、自暴になつて、國元を出奔する始末、イヤもう自分ながらお話にならん、愛想の盡きた事です、それから京都で鳩居堂の主人に拾ひ上げられて、六七人の門弟に教授をするやうになつたところが、隣へ引越して來た中島文吉、號は棕隠と云つて、詩は頗る上手な男、鳴東四時雜詩、京都繁昌記などを作つて、祇園や島原の花柳社界の内幕をスツバ抜いた位だから、放蕩學は卒業して居るはうです、其頃の流行歌にも、

富は駒、詩は山陽に、書は貫名、

經は猪飼に、粹は文吉

と諺はれましてナ、大阪の篠崎駒即ち小竹は潤筆錢を無暗に慾がるから、學者中の金満家、貫名海屋の書と、猪飼敬所の經學も名高いもので、之と同一の評判になつた中島棕隠の花柳通、其養子は中島錫胤と云つて、過激なる勤王家、足利尊氏、義詮、義満三將軍の木像の首を斬つて、三條磔へ梟した張本人ですが、親父の棕隠は、もう放蕩三味の男でした、それが僕の隠家に居て、毎日夕刻になると、オイ頼君、今夜は祇園へ交際ひ給へ、ナニ諸生に課業を授けなければならん、そんな面倒な事は抛つて置き、運動費は今僕が襦袍を曲けて來たと云ふ調子で、僕も根が大好きだから堪らない、直に尻馬に乗つて、押出す騒ぎ、こんな先生の教授を受けて居る諸生こそ災難です、然し其中僕も漸次分別が付いて、放蕩を止めました、そこで美濃の江馬細香と云ふ才女、書を書いたり、詩を作つたり、頗る評判ですから、これを妻に貰

ひ受けやうと思つたところが、先方の親が承知しません、但し細香は僕に餘程思召がありましたしてナ、イヤ自惚ではない、實際です、縁談不調となつた時七日七晩泣き通したと云ひます、今ならば失戀の新體詩でも作つて、華嚴の瀑布へボカンと行るところです、何時の時代でも人情に變りはありませんよ、其後小石玄瑞といふ蘭醫の媒妁で、兩宮某といふ商人の娘を貰う筈になつて、見合の日を定めて、小石の家へ従つて待つて居ると、何時まで経つても先方から來ない、散々待ボケをさせた上に、今日は都合が悪いから、明日にでもして下さいと云ふ斷り、僕も少し酒の廻つて居るところで、何だ面白くもない、約束した日を變更するなんて、そんな奴の娘は貰ひたくない、他から貰らて鼻を明かせて遣ると、威張り出しましたな、其處へ給仕に出て居る七八の丸ボチャ、小石の下婢ですな、縹致は二の町ですが、ちよつと愛嬌があるので、お前僕の妻にならんかと、單刀直入に訊いて見た、スルと顔を眞赤にして、庖厨へ逃げ込んだから、僕は直に主人の小石夫婦に向つて、どうで

す彼の女中を僕に呉れませんかと云ふと、小石の細君は失笑して、先生あんなお多福ぢやあと云ふのです、イヤ僕は串戯ではない、真劍勝負ですと、とう／＼貰つてしまつたのが、復次郎（支峰）三樹三郎二人の母です、身分は至極軽いもので、十二三の時から、小石の厄介になつて居たので、僕の許へ来るにも、小石が身元になつて、小石氏を名乗つて居ました、下婢上りの無教育の女ですが、家庭は能く治めて、僕も案外に可愛く、ちよいと出るにも、ハイカラ流に手を引合つて、京都では其頃山陽の駱駝と云つて、評判になりました、駱駝と云へば夫婦連の事、東京では鴛鴦と申すさうで、イヤ圖に乗つてつまらん事まで饒舌をして、耻入つた次第です、學問のはうは、元が放蕩で碌々勉強しませんから、十分には往かんです、外史を書くにも研究的に國史の詮索などは致しません、平氏源氏は保元平治物語、源平盛衰記、平家物語、北條氏は北條九代記位のもので間に合せましたな、あの引用書目は或人に作つて貰つて、三分の一は僕が標題も知らんものです、それでも鎌倉以

來天下の大權が、武門に遷つた事蹟を、簡易明晰に書いて置きましたから、大に世人に歡迎された次第で、自分ながら意外に思つて居りますと、手を舉げて顔を叩きたり。

〔三五〕 錢屋五兵衛の渡米 沒收の財産調べ

山陽に次で登壇したるは、加賀の錢屋五兵衛、西瓜に蜻蛉が栖つたかと思はるゝ大藥罐の丁髷頭、赤銅色の顔は雲慶の仁王とも云ふべし、而も黄八丈の襦袢の上に、猩々緋の羅紗羽織を着たるは、一種の異彩を放てり、鰐の如き口を開いて、亂杭齒を露はしながら、僕は山陽先生のやうな學者ではないが、時代は恰度先生と前後して娑婆に居つた、僕は明和八年の十一月加賀の國宮の腰に生れたから、先生よりは九歳の年長、千島開拓の卒先者近藤重藏君と同年だ、僕と同時代で、海外的智識のある者と云へば、先づ近藤重藏君など

が少しは話せるはうだ、高田屋嘉兵衛君も露西亞人に捕はれて、東察加まで往つて来たから、少しは海外の事情を知つて居たらう、嘉兵衛君は僕より二歳の年長だが、五十九歳で死んだ、僕は其後二十二年生き延びて獄中で往生したが、八十二歳といふ高齢で、別に惜むところはない、僕が牢死した翌年はベルギー提督が、始めて乗込んだ時で、日本人の眼が漸く覺め懸つたが、それまでの日本人は、實に井の中の蛙で話にならんよ、第一政府が馬鹿だ、十一萬石の大名でありながら、一汁一菜の外は喰はぬ、六尺の晒布を下帯にするのは惜しいから、二つに切て紐を付けて、二度に締るが好いなぞ、ケチ臭い根性の白河樂翁が海防掛りになつて居る始末だから、少し大きな事を目論むと、腰を抜かして騒ぎ出す、僕が三十三の時には、第一世の拿破崙が、匹夫から飛び上つて、佛蘭西皇帝の位に即いた時ちやアないか、烟管の雁首で雑水を煮るやうな事ばかり仕て居られるものではない、ナニ拿破崙の年齢、あの男は僕より三歳の年長だ、遇つた事はないが、兎に角彼れ程の仕事をし

た程あつて快活の男よ、ア、北米合衆國の華盛頓、彼の男は僕が二十八の時に死んだ、兎に角世界の二大偉人と時代を同じうして生れた錢屋五兵衛、小さい事は大嫌ひ、大小の船舶數百艘を願使して、南は支那沿岸より安南、暹羅、臺灣、呂宋、北はオコック海より、白令海峡、到るところの土人を相手にして、物品の交易を行ひ、殊に天保三年には僕六十二歳の老軀を提げて、北太平洋より北米合衆國に渡航したものだ、それがために日米貿易の議題は、合衆國の議會に提出せられて、其結果が浦賀灣頭に黒船の現出、日本人は驚いて、ソレ悪魔だ打拂へといふ大騒動、滑稽極まるではないか、イヤ自慢にあらず、事實を述べなければ、話の端緒が分らん、今でこそ晚香波や桑港へ往くのは、隣家の雪隠を借りるより容易いやうに、人が思つて居るが、其頃の亞米利加行と云へば誰も知るまい、それは借置き、僕が一代の大失策と云へば、河北潟の埋立工事、數萬俵の石灰を投じて、水底の土砂を凝結せしめんとしたので、五兵衛は毒を流したと云ふ無根の浮説、尤も湖中の魚類に何

等かの影響を興へたらうが、さしたる事もないのに、年來我富を羨み且つ妬む輩が、讒誣中傷の流言を放ち、之に雷同する多数の愚民、藩吏の恐慌、遂に大獄を起して、僕一家の滅亡、獄中に老死したる僕の死體を鹽漬にして、磔刑に行ふなどは、如何に暗黒時代とは云へ、呆れて物も云はれぬ、其時加州藩に没収されたる僕の財産は、

一大判千四百八十五枚

(此金高七萬四千二百五十兩一枚五十兩の見込)

一小判二千六百六十六兩

一古金三萬六千六百兩

一二朱金十六萬五千三百二十兩

一二分金五千三百三十兩

一天保錢五百三十二貫文(此金八十三兩)

一四文錢千六百六十貫文(此金二百五十九兩)

一藩札七十貫五百二十目

(此金千百七十五兩三分)

一現米三萬五千四百石

一田地高八萬五千三百石(外に開墾中數萬石)

一船二千五百石積四艘、千五百石積以上六艘、八百石積以上三艘、小船

十二艘

一倉八十棟、内煙硝倉一棟、外國品倉一棟

諸方へ賣掛代金並貸付金の内翌嘉永六年六月迄に入るべき金高帳簿にて

二十七萬五千三百兩

先づザツとこんなもので、現金ばかりが合計二十八萬五千六百八十三兩三分米穀田地船倉を併せて、今日の時價に換算すれば、二千萬圓以上は確かだ、それも宮の腰の本宅のみで、各地方に散在せる三十四ヶ所の支店を合算すれば、其幾十倍か分らぬ、三井が豪い岩崎がどうしたの云つて、僕の目か

ら見れば一掴みの身上、驚くには及ばないと、氣煩萬丈の有様なり、

〔三六〕 佐倉宗吾、五兵衛を苦しむ

大羅利國征伐の軍議

錢屋五兵衛が廣長舌を揮つて、得意になれる折柄、何處ともなく唸喊の聲起り、群衆の人々動搖めき渡り、懺悔演説に何の懺悔もなく、己れが財産高を示して、其富を誇耀するとは何事ぞと、罵りつゝ、壇下を目標に押寄せ来るは、佐倉の義民木内宗吾、篋笠に身を蔽ひたる数千の農民を率ゐ、潮の湧くが如く群々と詰め懸け、五兵衛も呆氣に取られて、暫く立往生の體なり、宗吾は五兵衛を屹と睨んで、こりや五兵衛、梟といふ鳥を知つて居るか、貧人の財を聚るは、梟の子を養ふが如し、子大にして母を食ふといふことが、寒山子の詩にもある、貴様も全く其の通り、財を聚めて散することを知らざるがために、却つて財のために身を損ひ家を亡ぼし、而も猶悟らずして、自ら

其愚を告白す、たとひ億萬の富を積んでも、娑婆の置土産で、今は何の役にも立つまい、シテ其傲慢の態度が氣に喰はぬ、ソレ諸君遣付ると云へば、篋笠連の一隊、五兵衛を壇より引下して亂拳雨の如く、滅茶々々の體なり、豊臣秀吉、伊達政宗、北條時宗、楠正成、徳川家康、西郷隆盛、大鹽平八郎を始め、何れも總立ちとなつて、漸く五兵衛を救ひ出したるが、側杖を喰つて、額に牡丹餅程の瘤を生じたるあり、頬を爪で引搔れ、蚯蚓腫になるもあり、一時は鼎の沸騰せる如く、上を下への大騒動なりしが、加藤、福島等が自慢の腕力を揮つて、鎮撫の功を奏し、宗吾其他の農民、悉く捕縛となつて、引据ゑられたり、會長秀吉は威儀を正して登壇し、宗五郎を一睨して、こりや宗吾とやら、五兵衛に對して、不満の事あらば、他まで口舌を以て穩かに論難するが宜いではないか、漫りに部下の農民を使喚して、暴力に訴へ、會の安寧を妨害するとは怪しからん、然し五兵衛も亦己れの富を吹聴して、漫りに當時の失政を怨み、財を聚めて散するを知らざるがため、自業自得の奇禍

佐倉宗吉、五兵衛を苦しむ大羅利國征伐の軍談

を買つたところに氣が付かん、實に宗五郎の云ふ通り、愚の極點だ、然し今日二人の罪を論ずる時でないから、以後二人共謹慎するやう叱り置く、と寛大の處置に、二人は顔を見合せ居たり、秀吉は更に改めて、一同に對ひ、懺悔演説をなさんとする者、猶後に數百人、既に姓名の通告もありますが、何時までも際限のない事、他日に譲るとして、別に緊急の議案を提出します、それは何かと云へば、海外發展の第一歩として、大羅利國征討の件、之に就ての可否如何、諸君十分に審議し給へと宣言すれば、北條時宗、徳川家康、伊達政宗、西郷隆盛等交も起つて意見を述べ、結局總起立を以て賛成を表し、それより各自の方略を諮問するに、本居宣長、平田篤胤等の國學者は、大風呂敷に伊勢の神風を包み、敵國に至つて、之を抜くが最上の策なりと云ひ、林羅山、伊藤仁齋、荻生徂徠等の漢學者は、孔子の木像を自働車に乗せ、先驅として敵陣に攻め入るべし、若し之に對し銃先を向ける者があれば、直ちに兩眼の明を失はんと主張し、七字の題目を軍艦に代へて士氣を鼓舞すべし

と云ふ日蓮上人、眞言秘密の咒文を唱へて、敵の軍氣を挫かんと云ふ弘法大師、異論百出紛々として底止する所を知らざる有様なりしが、兎に角作戰計畫は、北條時宗、徳川家康、西郷隆盛の諸將に委任し、夫々部署を定めたり、先づ第一陣は源義經、楠正成、第二陣は新田義貞、太田道灌、第三陣は武田信玄、伊達政宗、第四陣は即ち牙營として總司令官の豊臣秀吉、參謀長西郷隆盛、徳川、北條諸將も參謀として之に加はり、五陣六陣何れも古今の名將勇士いよく隊伍を整へて出征の途に上らば、其壯觀如何ばかりと思はれたり、斯くて部署も定まり、方略も決し、人々骨鳴り肉動き、豊太閤の音頭にて萬歳を三呼すれば、霹靂の轟くが如く、大地震動して、耳の鼓膜も破裂せんかと怪まれ、驚きて四邊を見るに、孤燈蕭然、枕頭を照して、東台の曉鐘に殘夢を攪破せられ、居士の身は冷かなる床の上に横はりぬ。

古人の懺悔終

佐倉宗吉、五兵衛を苦しむ大羅利國征伐の軍談

天許復製

明治四十一年六月廿一日印刷
明治四十一年六月廿三日發行

(古人の懺悔)

正價金四拾五錢

著者 東京府下田端百三十八番地 町田源太郎

發行者 東京市京橋區新肴町十四番地 福田滋次郎

發行者 東京市日本橋區吳服町十八番地 福田金次郎

北隆館書店

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 山田英二

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

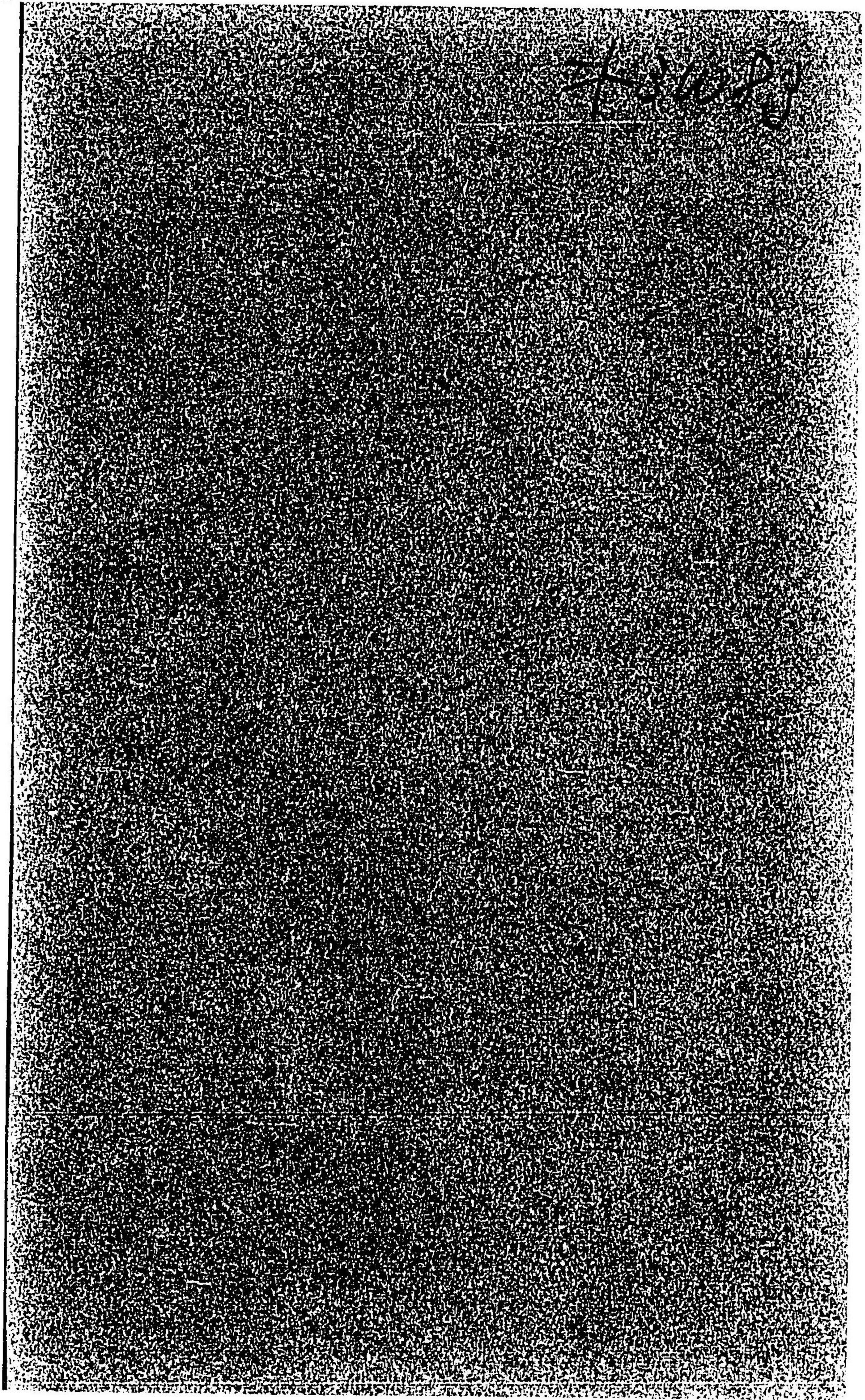
發兌元 東京市京橋區新肴町十四番地 晴光館

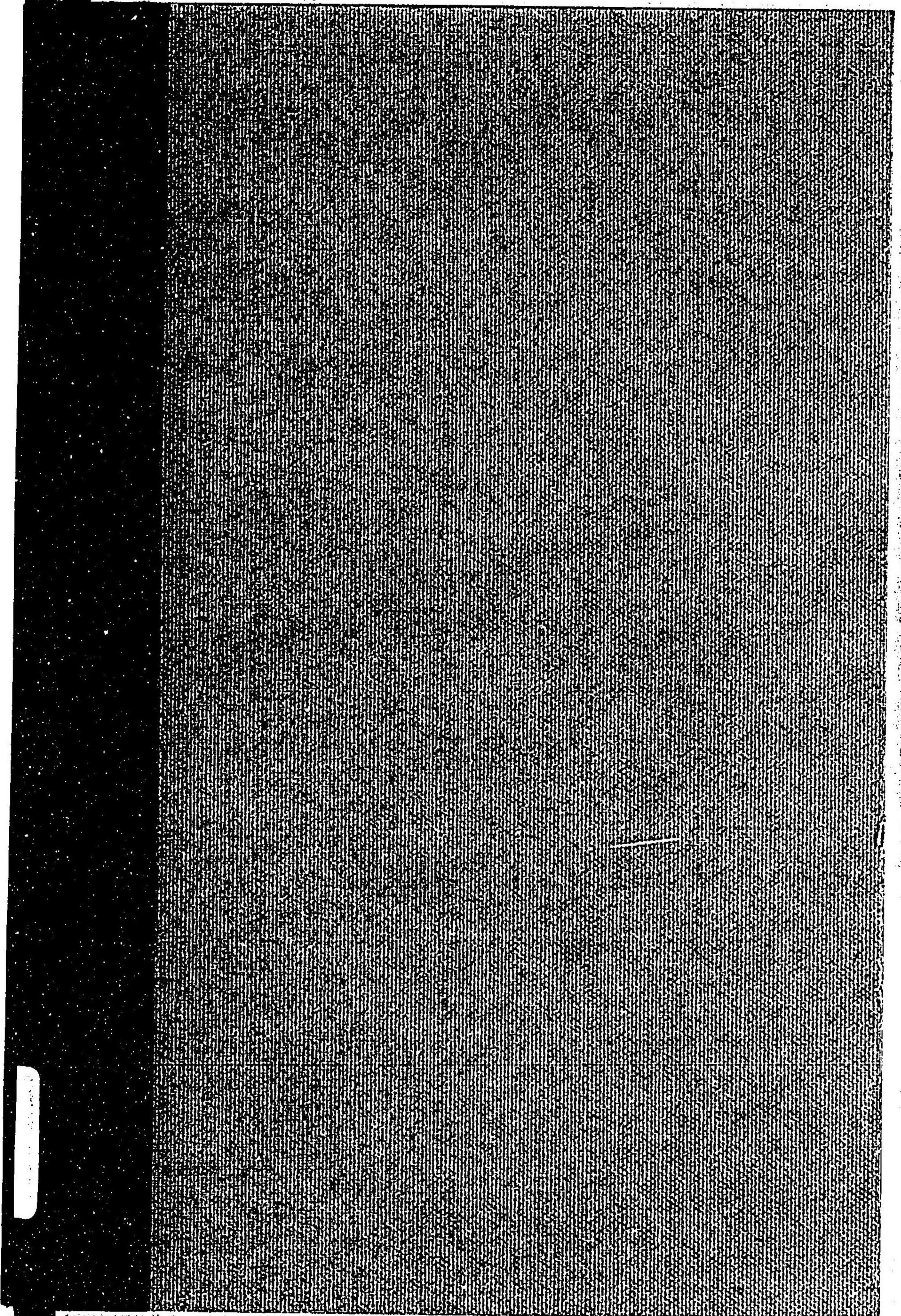
柳塘居士好評書目

十版	滑稽日本史	正價金三拾八錢郵稅六錢
四版	滑稽德川明治史	正價金三拾八錢郵稅六錢
三版	新作落語	正價金三拾五錢郵稅四錢
十三版	滑稽問答	正價金二拾錢郵稅四錢
七版	探檢南洋王	正價金三拾五錢郵稅四錢
四版	探檢空中軍艦	正價金三拾五錢郵稅四錢
三版	探檢地下戰爭	正價金三拾五錢郵稅四錢
近刊	滑稽未來史	探檢大魔國
	明治歷史之裏面	探檢神通力

晴光館發行

257
465





特 21

988

004429-000-5

特 21-988

古人の懺悔

町田 源太郎 / 著

M41

ACE-0940



Handwritten text in the top left corner, possibly a signature or initials.



Text located below the circular seal, possibly a date or reference number.

